

# 連珠っておもしろい

## 九段 河村典彦

### ●第19回●

#### 坂田吾朗さん追悼

あの坂田吾朗さんが5月にお亡くなりになった。非常に残念極まりない。そこで今回は、坂田さんの思い出について語ってみよう。坂田さんとの出会いは、まずは連珠本であった。私が名古屋時代に連珠会に通っていた時、少しでも実践の足しにと思って本屋で見つけたのがあの有名な「連珠必勝法」であった。当時から連珠本を探すのは苦労したが、今から思えばよくあの本を手に入れたものである。その本で全珠型の定石らしきものを一応は覚え（ようとし）、連珠が身近に感じたものであった。詰連珠も適当で、当時の私には「難しく感じた。巻末には「均衡打ち」の説明があり、それが今のルール問題にまで

影響していくことになる。とは、坂田さんも思いもしなかったであろう。

坂田さんの功績の第一は、何と言っても普及だろう。坂田さん、三森さん、早川さんの3人のうち誰かが昔は必ず連珠を始めるきっかけとなっていたが、中でも坂田さんの影響は群を抜いていたと思う。何しろ「日本連珠サービス」という団体を立ち上げたぐらいである。まさに24時間連珠漬けの生活であった。ちなみに、私は就職希望の第二候補に「日本連珠サービス」と洒落で書いたが、本心ではないかそんな職業に就いてみたいというのが夢であった。坂田さんの功績の第二は本を書き起こし出版までこぎつけた事である。私も学生時代に「将来連珠の本を出したいのですが」と坂田さんに相談した事があり、それはとても懇切丁寧にアドバイスをくれた。（まあ簡

単に考えると良くないという現実の厳しさを教えていただいたのだが）

「連珠必勝法」に写真が掲載されていたので顔を知っておりそれが元で記憶がごっちゃになっていてのはが、実際にお会いしたのは随分後だったように思う。私が京都連珠会に入って研鑽していた頃はちょうど連珠世界誌の編集長をされており、何度か投稿しているうちに覚えてもらえるようになった。そのうち詰連珠の依頼や添削などでやり取りをするようになり、私が詰連珠を掲載した京大学生新聞のコピーを送ったりもした。何度か連珠世界用の詰連珠を依頼されたが、なかなか採用されなかったことを考えると、当時はまだ制作技術が未熟だったのだろう。

これに関連するが、坂田さんの功績の第三は坂田さん自身最も得意であった詰

連珠制作である。坂田さんとお会いした時にいろいろ話をしたのだが、詰連珠の条件（主に新聞用）というお話が印象に残っているの

① 天元黒石、黒白同数（黒先の場合）であること

② 9×9以内のサイズに収め、石数は各10個以下のこと

③ 初心者が思わず解きたくなるような形である事（変なところに石があったり見るからに複雑そうなものはダメ）

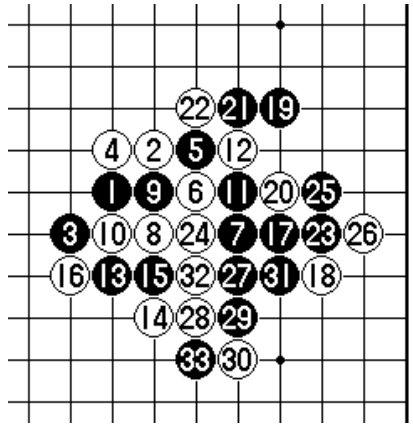
④ 正解手順は1通りであること。無駄な四ノビをした場合でも、それを打つと勝ちがなくなるよう

うにしておくこと

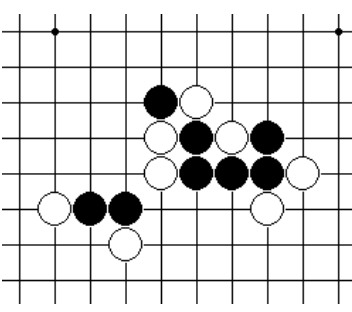
以上であるが、私も①～③までは常に心がけているのだが、最後の④を満たすのが難しい。四ノビの筋を消すのは難しく、通常ノリ手にしておくのだが石数が増

えてしまうという難点がある。私は①③が満たせるなら多少手順前後があっても目をつぶって出してしまおうが、坂田さんは絶対に譲らない。「やろうと思えばできるんだから、やらなくちゃ」と言われていたが、全部の条件を満たす問題をかたりの数用意されていた。最近作った詰連珠を題材にしてみよう。私はたいいてい実戦譜や研究譜の中から手順だけ切り取って詰連珠にすることが多い。したがって、研究の副産物として詰連珠ができてくる。

斜月の黒5は現在ハンゲーム上で指導(教室)の教材となつている局面である。白10の防ぎに黒11と構えるのが定石なのだが、その後も変化が多い。白12と三を引くのも強く、対して黒は19まで落ち着いて組み立てるのが良い。ここで白20がなかなかの強防で、黒21とミセ手を打った時に

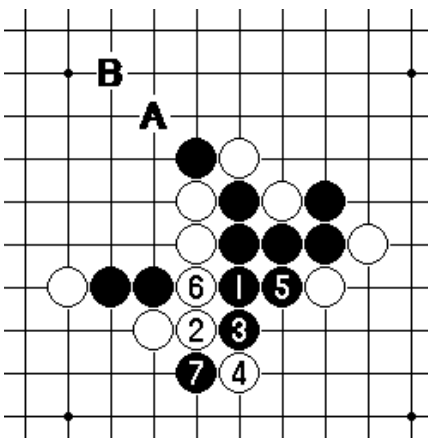


白22は強くなく、黒23で勝ちとなる。この時、白24から止めると黒25とミセて以下引き詰めとなる。最後の手順がノリ手のため限定で、いわゆる手筋が必要となる。このエキスだけを取ったのが次の詰連珠である。



黒白5個ずつ取り除き、天元を移動

上の珠順と比べてみると、特定の石だけ取り除いた(残した)ことがわかる。余分な石だけ取り除き、天元をずらせば基本的にはこれで問題は完成である。あとは余詰めがないかをチェックするだけであるが、ここで手間取ると結果的に没になる事が多い。いい問題ほど結構簡単にできたりする。しかし、坂田さんの原則に当てはめると、一点不満な点がある。



AまたはBの四ノビは勝ちにまつた関係なく、いわゆる「無駄な四ノビ」で

ある。この四も打てない(打つと勝てなくなる方がなお良い)ようにしておくことが必要という訳である。京大学生新聞用の問題なので私は石数を増やすよりは形の良さ(石数の少なさ)の方を重視してこれで完成としている。これが一般の新聞用ならば、Aに白石を置き、黒石を1つ追加する処置が必要だろう。

坂田さんがどのように問題を作成されていたのかは不明だが、私はこのように実戦や研究から作成している。研究をしたり実践の反省をすることが副次的に詰連珠も生み出すことになる、という好循環になっている。そしてこれが長く作り続けることができる秘訣かもしれない。「連珠は一生続けられる趣味だからぜひ続けてください、天国でも連続した坂田さん、天国でも連珠を広めている事だろう。」